

研修会報告 「第2回 学生相談を考える会」

平成20年12月22日に「第2回 学生相談を考える会」を開催した。以下は、石岡学生課長補佐による講演記録である。

平成20年度メンタルヘルス研究協議会シンポジウムから 立教大学の報告と本学の学生相談についての一考察

弘前大学学務部学生課 石 岡 勝 彦

I. はじめに

学生課の石岡と申します。皆さま、年末のお忙しい中、お集まりいただきありがとうございました。また、今回は他大学の方々にもお忙しい中、いらしていただき、ありがとうございました。今回の報告は、今年の9月19日に国立オリンピック記念青少年センター（東京）で行われた、平成20年度メンタルヘルス協議会シンポジウム「学生の多様なニーズとメンタルヘルス支援—メンタルヘルスに関する先進的な取組より—」において発表された立教大学学生相談所カウンセラー山中 淑江氏の「学生相談を核とした全学的支援の展開—学生と大学をつなぐ「よろず相談」の活用—を紹介するとともに、本学の学生相談について考察してみました。シンポジウムの司会は本学の保健管理センターの佐々木所長と帝京大学の元永拓郎先生でした。また、今回の報告および資料の配布等については山中先生の下承を得ております。

II. 立教大学学生相談所について

1) 立教大学の建学の精神

立教大学では創立以来、建学の精神に「キリスト教の精神にもとづく人格の陶冶」を掲げ、知育・徳育をともに重視する高等教育機関として、自立した個人であるとともに、相互に尊重し合う人間、すなわち「専門性ある教養人～共生社会を創る自立した個人」を育成しております。キリスト教の精神というのが弘前大学を含む他大学にはないものでありますが、相手を思いやる精神は、本学としても学ぶべき点であると考えます。学生相談所の設立が1954年という50年以上の歴史があります。

2) 学生相談所の役割と活動

学生相談所では「よろず相談」を入口に、悩みや不安を持つ学生1人ひとりに対して向き合い、カウンセリングとガイダンス、またこれらとプログラムとのお互いに補い合うアプローチによって、大学生活への適応を支え、さまざまな青年期の課題への取組を通じて学生の成長・発達を大学コミュニティ全体で支える環境作りを先導しています。相談活動から得られた学生状況・発達への理解は、学生相談所所員会を活用して学内に還元し、新たな学生支援施策や正課・正課外プログラムに活かしています。

表1のように、個別対応及び各種のプログラムによる組織的な対応の両輪の循環サイクルによって、あらゆる場面においても学生を支えるシステムが確立されています。学生相談所の活動には、学生と個別・随時に向き合う「個別ケア」と、広く学生が参加して体験的な学びを得られる機会を提供する「プログラム」等があります。学生は、「個別ケア」で得た助言や自己理解を、大学コミュニティで

の実践に発展させ、そこでの体験を再び「個別ケア」で自己の中に吸収させる過程を循環的に繰り返すことによって学習を重ね、成長・発展を遂げる。このような体験的機会を提供する「プログラム」とお互いに補い合うアプローチをとっています。

表1 立教大学の学生相談所の役割と活動

1. 相談所の役割

- 1) 学生相談所の目的：学生生活上・就学上の問題の解決
- 2) 学生相談の指針：学生の自発性・独自性を尊重しながら、自立した個人を育成する。
- 3) 本学における学生相談所の役割：個々の学生を成長・発達に即して支援し、学生のニーズを把握して大学全体に還元する。→「学生相談」の視点から本学の学生支援を支える

2. 学生相談所の活動

- 1) 生活支援：よろず相談，カウンセリング，教職員コンサルテーション
 - 2) 教育・予防：心理教育プログラム，正課プログラム，正課外プログラム，予防教育
 - 3) 心理臨床：メンタルヘルス，心理療法援助，精神科医療ケア，療学援助
 - 4) ネットワーキング：教職員ネ 5) 調査研究・普及啓発：調査研ネットワーク
 - 5) 調査研究，普及啓発：調査研究，啓発・情報発信，職員研修
-

3) 各プログラムの紹介

a) 体験的・実践的プログラムの展開

体験を通じて、自分を理解し、人との関わり大切さを知ることです。例として、夏季フィールドワーク「林業体験」―陸前高田の森に学ぶ―と題し、林業体験（下草取り、枝打ち等）及び地元での民泊や炭焼き、田舎豆腐作りなども行います。主催は学生部。

b) 心理教育プログラム

「自己理解」「対人関係スキル」「自己表現」「身体への気づき」「生活スキル」等をテーマとし、講義や実習を支えた体験的学習を行います。例としてアサーション・トレーニングといわれるものです。これは講義と自己点検のチェックリスト、小グループでの簡単なワークやディスカッションなどを行います。それらを通じ、自分らしさを活かし、かつその場の状況に応じた適切な自己表現を身に付けることを目指す。というものです。主催は学生相談所。

c) 正課プログラム（授業）

他者との関連性を通して自分を見つめ、生き方について考え、コミュニケーションの大切さを学ぶ例として全学共通カリキュラム総合B群「対人コミュニケーション」があります。「対人コミュニケーション」について、夏の4日間で集中的に学び、講義で知識だけを学ぶだけでなく、実習を行いながら「対人コミュニケーション能力」向上のためのスキルを体験的に学ぶものです。正課科目なので、履修登録が必要です。主催は学生部。

d) 正課外プログラム

人との出会いを通じて、自分を知り、生きることについて考え、学部学科の枠を越えたさまざまな学生と出会い刺激を受けます。フィールドでの体験と関わりを通して、新しい自分に気づきます。例としてネクストリーダーズプロジェクトがあります。このプロジェクトは、立教大学、関西大学、琉球大学の3大学が地域性などお互いの特性を融合させ、次世代を担うリーダーを養成するプロ

ジェクトです。ここでは、学生生活に慣れてきた学生（主に1・2年次生）が「今後の大学生活をどう過ごすべきか」について、他者との協働を通じて、自分自身で考える機会を持ちます。2泊3日の合宿で、育った環境が違う学生がグループワークでお互いを高め合い、社会人との関わりの中から自らの学生生活での課題、将来の目標を発見していくものです。

4) 学生相談所の構成員と学内他部署との連携

2つのキャンパスの学生相談所には、現在、専任カウンセラー2名、職員の相談員3名、非常勤カウンセラー5名、嘱託精神科医2名を配置し、きめ細かく相談に対処しています。また、チャペル、各学部、図書館、教務部、キャリアセンター、診療所・保健室、国際センター、人権・ハラスメント対策センター、身体しょうがいしゃ支援ネットワーク、ボランティアセンター、および学生部の教職員により構成される全学的な「学生相談所委員会」などを有し、相談状況に関する意見交換会や所員の研修を行っています。所員は学生の相談にあたるとともに、所属組織において学生相談で得られたさまざまな情報を伝えており、その情報は教職員による的確な助言や指導に役立てられています。

5) 取組の有効性

多くの学生が自身の問題を解決し、自己の成長を実感しています。2004年度来談者数は545名（在学生数比率3.3%、のべ3,854名でありました。来談者の約8割から助言の適切性や有効性について、肯定的な評価を得ております。退学率は2004年度0.8%と私大全国平均3.3%より低い実績をあげています。これは学生相談を含め、学生が自身の状況に合わせて悩みや問題を解決できる学生支援ネットワークが機能した結果であります。

Ⅲ. 弘前大学の学生相談体制

1) 学生なんでも相談室

廣中レポート（文部省高等教育局，2000.6）において「何でも相談窓口」の設置が提案され、学生によって利用しやすい相談窓口の設置と、そこを入り口とした全学的な学生支援システムの構築が求められることになり、本学にも設置されました。

2) 学生相談体制

準教授、講師の学内カウンセラー2名、学外カウンセラー1名の3人体制でおこなっています。学内カウンセラーは月曜から金曜まで保健管理センターの相談室で学生等及び職員の相談を受け付けています。また、毎週木曜の午前か午後弘大附属学校に出張相談、水曜日の午後本町地区の出張相談もおこなっています。学外カウンセラーは毎週水曜日の午後に総合教育棟の学生相談室で学生の相談を受け付けています。

3) 第1回 学生相談を考える会

平成20年9月12日（金）に実施しました。多様化・複雑化する学生相談に適切に対応し、学生の支援体制を充実させようと、教育学生委員会と保健管理センターが中心となり、クラス担任を主な対象にした研修会として総合教育棟201講義室において開催しました。

本会は、学生相談の窓口である学内外のカウンセラー、教員、事務系職員が連携・協働して取り組んでいこうと初めて開かれ、約80人の教職員が参加しました。佐々木保健管理センター所長による「学生相談の基礎知識」についての情報提供、次に田名場同センター准教授による最近の学生像を把握するために、1年次必修の基礎ゼミナールの担当教員を対象に行った調査結果（回収率71%）を「課題未提出、欠席、無気力な学生への対応で苦勞する教員が多い」などの報告がなされました。引き続き、

同センターの田名場准教授，高橋講師，佐藤学外カウンセラーによる無気力な様子の学生と，指導しようとする教員とのやりとりを，ロールプレーイング（役割劇）での実演がなされました。

4) 今後の学生相談の取組

本会を継続して行っていく，その会ごとにその時一番必要と思われる内容を入れ込み，カウンセラー，教員，事務の連携・協働を図り，学生相談を通じていかにすれば，学生のためになるかを共に考えていきたいと思います。今後は，保護者や地域住民との連携も視野に入れていくことや，ホームページに予約状況や学生相談に役立つ内容をリンクさせ，また，今回近隣の大学の方とお互いに情報交換して，本会を実りあるものにしたいと思います。

私も4月からの短い期間ですが学生と接してきましたが，相談内容はアカデミックハラスメント，精神的な悩み，学業に対する不安等さまざまです。1番大切と思うのは，まず学生の話を親身になって聴くこと，2番目は決して上から目線で言わないこと，自分の気持ちを「指導モード」から「相談モード」に切り替えて相手にとって何が1番必要なことであるかを親身になって考えることが必要となります。このことは，普段の学生対応にも応用できると思います。こちらが丁寧な対応をすれば，相手からも丁寧な対応が返ってくると考えます。きついことをいうのも，冷静に理論立てて丁寧という相手に伝わると 생각합니다。

IV. おわりに

最後になりましたが，今回のこのような取組等の経験をたくさん積むことによって，学生相談における連携・協働する体制が構築されると思います。どんなにすばらしい資源・システムがあってもそこに，「優しさ」及び「相手の立場にたった対応」がなければうまくいかないと思います。また，学生・教員・職員が互いに育て合うことにより，より良い関係が築かれる，と考えます。以上で私の報告を終わります。ご静聴ありがとうございました。

（参考資料として，立教大学学生相談所刊：教職員のための学生相談 Q&A，2006年を配布）